春や深川

子母沢寛

目次

春や深川

盲ぼら……七
蛤町……一七
お女中……二八
梵天帯……三九
無住心剣……四八
矢場……五八
雨夜の星……六七
洲崎の土手……七七
強請……八七

六郷田ン甫……九六
爪化粧……一〇六
涼み花火……一一六
大島半五郎……一二六
晩鐘……一三七
梢の芽……一四六
心の中の姿……一五七
麻上下……一六七
白扇太刀……一七七
亭の暗闇……一八七
破れ穴……一九六
湯本の宿……二〇六
木賀の里……二一七
あらしの夜……二二七
蛇骨川……二三七
空店……二四七

兄弟……二五六
紋付姿……二六六
舟……二七七
夜明け……二八八
青い空……二九八

装幀　山本武夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

春や深川

盲ぼら

師走の星は青白く、ぽつーつと明るく見える空の隙間から、鎌のような月が覗いている。もう五つ刻限。今宵は妙に生暖いせいか、大川端は薄靄こめて、河岸の町家の小さな灯がちらりちらり。

だが、時々思い出して、北風がさつと刺すようにあおつて行く。今、その風に引張られて、永代橋の東詰から、行燈はお定まり蛇の目に当り矢、急ぎ加減に渡つて来る夜鷹蕎麥や。橋へかかつて呼声はないが風鈴だけが、ちりんちりんと鳴つている。

渡り切つて、丁度高尾稲荷の前。出しぬけに、

「おー蕎麥や」

と一人の男。手甲脚絆に草鞋ばき、双子ずくめの道中姿に甕覗きの手拭を米屋かぶりにしていた。

「一杯呉れろ」

「へえ」

蕎麥やは直ぐに荷を下ろして、

「おかめ、しつぽく玉子とじ、何んに致しましよう」

「かけでいいんだ」

「へえへえ——。お寒うございますなあ、今年は暖い気狂陽気だなどと申しますがやつぱり季節でございます。いやどうも風がお寒い。いかがでございます。こちらの行燈の蔭へお入りなさいましては。

いくらか防ぎになりましょう」
「有難よ。見れあ川ツ面にぽつぽつ釣舟らしい燈火、めくらでも出てるのかえ」
「そうなんですよ、ここんところ大そう上りますそうで。お客様も釣がお好きでございますか」
「ふん、おいら、深川つ子だよ」
「さよですか。めくらの出る年はこの先き大川の外の釣はいけないと申しますが本当でございましょうかな」
「よくそんな事を云うなあ。鰡という魚あ毎年冬になると脂がのつて目の玉が紙を張つたように白くなる。これを俗に盲になつたというが、ただそれだけの事だろうたあ思うんだが」
「さよですかな」
口は口、手は手。蕎麦屋は荷の押斗から蕎麦の玉を出して、細長い笊の中へ投り込むと、片手で小さな棚にのせてある丼をとつて、その丼と笊を鉄砲釜でわかしてある熱い湯の中へ突込み、双方同じようにくるくる廻しながら、あらためて、笊を出して地べたへしゆつしゆつと湯を切つて丼の中へあけると徳利で熱くおかんをつけてある汁。それをかけて割箸を添え、
「へえ、お待遠さまで」
旅人は、出した丼を受けとつて、箸を口にくわえてぴーんと割つた途端、思わず、ずずツと二、三尺も身を退いて、顔色を変えて橋の方をじツとにらんだ。
が、何んと思いついたか再び今迄通り悠々とした様子で唐辛子を貰つてたつぷりこれをふりかけて

如何にもうまそうに一ぱい喰べた。

「代りをくんねえ」

言葉は静かだが、眼は白く光つて橋の方から離れない。こつちへ来る「御用」とたつた二字書きつ放しの提灯はいうまでもなく定廻りの町方の同心。ちやりツちやりツと雪駄の裏金の音がする。小者が前後に一人ずつ。

早くも蕎麦やの前へ来た。

「靄の立つ程暖いんだが妙に冷え込む。蕎麦あ一ぺえ食おう」

黄八丈の袷に黒の羽織を型通りにじんじんばしよりのまだ若いいい男の同心。小者へそういつて荷の側へ近寄りながらじろツと先客の旅人を見た。

びくつとした。

丁度、旅人の手にお代りの丼が渡つたところだつた。

「おう」

と同心、旅人の方へぐいつと顎をしやくつて、

「七、広いようでも狭めえ世の中、ここでおれに逢うたあ余ツ程てめえの運も詰まつた。とらツ、神妙にしろよ」

ぱつと十手。小者も素早く旅人の両脇へ廻る。こつちは知らぬ顔。

「てめえもこの辺が一とつ風呂浴び時だろう、小塚つ原で三尺高けえ木の上から、月見をする程悪事

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

が積んでは所詮仕方がねえ事だ。伝馬町か、悪く行つても佃の苦役、心も身も洗つて来い」

旦那の眼くばせ、小者二人がさつと双方から十手をかざして打つてかかつた。

「七之助、神妙にしろッ！」

ぱつとからだがかわつたと思うと、手に持つていた蕎麦の丼、同心の顔の正面を目がけてぶつつける。こつちもさつと顔をかわして、うしろへ飛んで行つた丼のがちやーんと壊れる音。

その時は旅人、もうとつくに永代橋を、物がひらめくように橋の中頃まで逃げていた。

「御用だ」

小者の一人、早くもすつ飛んで旅人の頸筋へ手を延ばし、着ていた道行の襟を鷲づかみ。力一ぱいぐいッと手元へ引いた途端。するつと他愛もなくそれがぬげて、あつと思つた時は、もう旅人のきりりと引締つたからだは、欄干越しに宙を飛んで、大川の水面へ丸くなつて落ちて行く。

ぱつと夜目にも真つ白な水のしぶき、ざぶーんと大きな音がしたが、それつきり再び何処へ顔を出したか、川をはつた濃い靄にかくれて見えない。

「旦那、すんません、飛んだ失敗をやりやした」

詫る小者。

「いい、いい、小猿と綽名のある程の名代な勾配の早え野郎だ、仕方がねえ。が、こんなところで、ひよつこりおれ達に面を見られるようではもう先きが知れている。半年ばかり江戸を空けていたと思つたら野郎また戻つて来てやがつたんだな」

そうは云つたものの、いくらかは未練がある。二三度川ツ面を見下ろした。
「あれー！」
屋根舟の閉めた障子を半分開けて、真つ暗な川面を覗き乍ら、思わずあげた甲高い若い女の声。
「これ、静かにしろ、たつた今永代から飛込んだ人だ、仏様ではないよ」
「で、でも——」
女ははあはあ大きく肩で息をして、片手を舟の間の疊に支えてのけ反つた姿。
「はツはツ。罪ないたずらをする人もあるものだ。六や、見てやんな」
「へえ」
云いつけられて舟頭の六。舟べりから川をじろりと見廻した。
「おう、何処にくつついていやがる、面あ出せ」
屋根舟の障子の内は、酒肴、火鉢もある。結城ぞつきの澁好み、四十がらみ、でつぷりして眉が濃く大きな目玉。深川矢倉下の芸者小千代を対手にちびりちびりと嘗めるように酒をのみ乍ら片側の障子を少し開けて、そこから寒中の盲鰯の錨釣をやつていた。
小千代は小さく慄えている。
「大丈夫だよ。六は今はあたしのところの水汲み男はしているが、腕つぷしは大そうなものだ、韋駄天が革羽織を着て鬼鹿毛へのつて来ようとも驚ろかねえといつも芝居もどきに威張つているから」
客はくつくつと小さくふくみ笑い。こんな事なんかどつちがどうなろうと屁とも思つてはいない塩

梅だ。

今、障子の外の舟べりへしがみついたのを、それと気がついて開けて見た小千代を、仰天させた男は、するすると艫の方へすべつて行くその襟つ首を、六はぐつとつかんで、障子をもれる舟行燈の方へ顔をねじ向け乍ら、

「おやツ？　お、お、お前、し、し、七じやあねえか。旦那、すんません、この冬に大川を泳いでる河童見てえな頓狂な奴あ、あつしの実の弟でごぜえやしたよ」

「兄貴、親指あ誰だ」

水の中から、ざんばら髪の七之助、左手を舟べりにかけ、右手の親指をひよいと出して、低く、につこり笑つた。

「吉原の松葉虎屋の安左衛門旦那だ。お前がどんな兇状持でも、筋せえ通れあ助けて下さる。安心して、まあ上れ」

「そうか、すまねえ」

「小千代さん、不思議なもんだ、聞いての通りあつしの弟だ。もう怖がる事あござんせんよ」

いう舟頭を安左衛門は、にやにやして、

「お前の血肉の弟なら、いつそ怖えとよう」

「へつへつ、飛んだこつた」

艫の板場に、ずぶぬれのまま、ぴつたり坐つた七之助。ちらツと小千代を見たが、俄かに変る顔の

色、ぐうーつと上気して、がた〳〵がた〳〵慄い出した。が、歯をぐいつとかみしめて、それを堪えようとからだを固くして旦那の方へ両手をついて額をすりつけるようにして終つた。

「さつき魚が当つたからひよいと障子から顔を出した拍子に橋の上にちらりと御用提灯が見えたつけが、お前さん、追われているんだね、兇状は何んだねッ」

表べは笑つているものの、その何んだねッといつた時、じろりッと流し見た安左衛門の目のいやもう凄いこと——。

「両国の盛り場で平場叩きの巾着切。小猿の七の、七之助のと仲間の中じやあいつてやすが、何あに大した悪黨じやあござんせん」

と、これは先走りをして舟頭姿の六。

「お前は元はその盛り場の見世物小屋の因果物師、綽名についた因果小僧の六之助。そ奴の弟というからには、どうせおツつかツつの悪黨だろうよう」

「へッへッへ。旦那、小千代さんのいる前で、そのお言葉あ少々罪でござんすねえ」

「おう、大きにそうだつた。辰巳芸者で名は売るが、男嫌えで男知らず、云わばおぼこの小千代の前で、今は大層真面目になつたお前の素姓をずけずけ云うは如何にもわたしが悪るかつた——が、小千代、怖くあないなあ」

「あい、六さんの弟さんなら例え鬼でももう怖くはござんせんよ」

小千代はやつと落着いて、今迄真つ蒼だつた頬にうつすらと紅がさして来ている。

「着物といつても代りは無し、六、お前一枚ぬげ、おれも羽織をぬいでやるから、今夜はこれで釣は思い切り、早く河岸へ舟を持つてけ」
安左衛門は羽織をぬぐと、丸めてすつと艫の方へ投げてやつた。
「さつきの橋の十手が何処で張つてねえもんでもねえ、旦那、行燈を消しやしよう」
と六之助。
「そうだなあ、じやあ小千代、こつちへもそつと寄つていな、六はお前に惚れているから暗闇では何にをするかわからない。尤も六は女と名のつくものには誰にでも惚れるが」
「ご冗談でしよう。何んぼあつしが器用でも、舟をこいだり小千代さんに、ふざける事あ出来やせんや」
「はツはツ。それもそうだ。が、早くその七之助とやらのからだを拭いてやらなくちやあ、風邪をひくよ。慄えているじやあないか」
その夜更けて、深川富岡橋の際にある舟宿舟鉄の二階。因果小僧と小猿七之助の本当の兄弟ただ二人。
膳を前に大あぐらでさしつさされつ。
「お前が素直に仕えている位の人だから、対手あ、女の生気を吸つてる脂つこい只の女郎屋の亭主じやあねえだろう」
「知れてらあ。あれあな七」

と六之助は、じろりと四辺を見廻して、
「うまく女郎屋の亭主に化け、白つとぼけてはいるけれど、あれが雲霧仁左衛門だ」
「え？　甲州で偽代官を働らいた大盗つ人の雲霧かあ」
「この六之助は元よりの事、木鼠吉五郎、洲先の熊、おさらば伝次に山猫三次、ちつたあ名前の通つた野郎があの人の前じや大声一つ出せねえ始末」
「いや、あの貫録じやあそうだろうとも」
「酒はほんのちよつぴり、しかも滅法な女嫌えさ」
「え？　じやあ、さつきの女あ」
「只、娘のように可愛がつているだけだ——どうやら、それには訳もありそうだが、仲間の内でもその訳合を知つているのは木鼠の兄貴位のものだろう」
「ふーむ」
「どうだ、いくら稼いで見たところで多寡が巾着切じやあ知れている。毒を喰わば皿までの譬、いつそお前もおれらの一味にへえらねえか。おれが親分に頼んでやる」
「兄貴折角だが、そ奴あ忌やだ。真つ平だ」
「どうしてだ」
「人様のふところの物をかすめる商売、同じと云えばそれ迄だが、おれあ真つ昼間、人の大勢いる前で、ふところを切る巾着切。こそこそ盗つ人は嫌れえだよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com